第４回長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会

日時：令和６年９月３日（火）
18 時～19 時 30 分
会場：千曲市役所 301 会議室

次 第

１ 開　会

２ 県教育委員会挨拶

３ 会議事項
（１）第３回長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ
（２）再編基準の見直しについて
（３）更級農業高校の学科改編について
（４）新校の学校像・生徒像について
　　・これまでの懇話会の振り返り
（５）意見交換
（６）その他

４ その他
　次回の予定
　【期日】　令和６年 11 月または 12 月（予定）
　【場所】　篠ノ井総合交流センター（予定）

５ 閉　会

長野千曲総合技術新校 再編実施計画懇話会 構成員名簿

	区分	氏名（○：座長）	所属等	役職等
1	自治体	西澤　雅樹	長野市	副市長
2		丸山　陽一	長野市	教育長
3		小川　修一	千曲市	市長
4		小松　信美	千曲市	教育長
5		塚田　常昭	坂城町	教育長
6	産業界	市川　伸一	ＪＡグリーン長野総合企画部企画広報課	課長
7		福田　享士	株式会社システックス	常務取締役
8		矢島　隆生	フレックスジャパン株式会社	代表取締役社長
9		滝沢　秀治	滝沢食品株式会社	代表取締役社長
10	学識経験者	森下　孟	信州大学学術研究院教育系	准教授
11		○藤本　光世	元県立高等学校長	
12	地域	坪井　俊文	長野地域振興局	局長
13		海野　忠一	長野市（篠ノ井地区）	
14		香山　篤美	長野市（松代地区）	
15		赤地　憲一	千曲市	
16	同窓会	越　　正至	更級農業高校同窓会	同窓会長
17		細川　隆男	松代高校同窓会	同窓会長
18		赤塩　曜子	屋代南高校同窓会	同窓会長
19	ＰＴＡ	小田切　勇	更級農業高校ＰＴＡ	ＰＴＡ会長
20		宮澤　洋介	松代高校ＰＴＡ	ＰＴＡ会長
21		山﨑　みさ子	屋代南高校ＰＴＡ	ＰＴＡ会長
22		吉澤　多恵子	長野市ＰＴＡ連合会	代表
23		唐木　文子	更埴ＰＴＡ連合会	代表
24	小中学校等関係者	宮尾　昭広	長野上水内校長会 広徳中学校	校長
25		中野　禎仁	更埴校長会 戸倉上山田中学校	校長
26		倉島　さつき	稲荷山養護学校	校長
27	再編対象校	武田　拓斗	更級農業高校（生徒）	農業クラブ会長
28		武藤　穣	更級農業高校	校長
29		徳武　晃	更級農業高校	教諭
30		今川　千桜	松代高校（生徒）	商業科代表
31		向井　健太郎	松代高校	校長
32		宮林　正樹	松代高校	教諭
33		伊藤　七菜	屋代南高校（生徒）	ライフデザイン科代表
34		竹内　宏枝	屋代南高校	校長
35		肥田　尚音	屋代南高校	教諭

【事務局】

学校名	氏名
更級農業高校	丸山　暢之（教頭）　徳武　晃　石澤　圭祐
松代高校	阿部　栄智（教頭）　宮林　正樹　坂本　成久
屋代南高校	櫻田　智也（教頭）　肥田　尚音　土屋　友紀子

	氏名	所属等	役職等
県教育委員会	佐野　浩一郎	高校教育課 高校再編推進室	室長
	井出　敦	高校教育課 高校再編推進室	主幹指導主事
	山﨑　巌	高校教育課 高校再編推進室	主任指導主事
	宮嶋　直美	高校教育課 高校再編推進室	主任指導主事

第3回　長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ（案）

日　時	令和６年６月 10 日（月）18 時 00 分～19 時 30 分		
場　所	篠ノ井総合交流センター　多目的ホール		
出　席 **（敬称略）**	西澤雅樹、丸山陽一、小川修一、小松信美、塚田常昭、福田享士、矢島隆生、滝沢秀治、森下孟、藤本光世、海野忠一、香山篤美、赤地憲一、越正至、細川隆男、赤塩曜子、小田切勇、宮澤洋介、山﨑みさ子、吉澤多恵子、唐木文子、宮尾昭広、中野禎仁、倉島さつき、武田拓斗、武藤穣、徳武晃、今川千桜、向井健太郎、宮林正樹、伊藤七菜、竹内宏枝、肥田尚音 （以上 33 名）		
欠　席 **（敬称略）**	市川伸一、坪井俊文（以上２名）	**傍聴者**	27 名（オンライン５名含む） 報道関係３社
事務局	更級農業高校	丸山教頭、徳武教諭、石澤教諭	
	松代高校	阿部教頭、宮林教諭、坂本教諭	
	屋代南高校	櫻田教頭、肥田教諭、土屋教諭	
当日資料	第３回懇話会資料、講演資料、第２回懇話会の講演追加資料、アンケート用紙		

会議事項

（１）第２回長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会まとめについて
（２）講演「これからの高校を考える」講師：国立大学法人鳴門教育大学教員養成ＤＸ推進機構長　藤村裕一教授
（３）質疑応答・意見交換

講演会概要・質疑応答（要旨）（→回答）

【講演概要】

〇先進的な全国５校の特色ある取組事例の紹介
・宮崎県立小林秀峰高校　　・名古屋市立西陵高校　　・岡山県立倉敷鷲羽高校
・札幌市立札幌旭丘高校　　・広島県立広島叡智高校

〇人材像の転換
・変化が激しく予測困難な VUCA　World（変動性・不確実性・複雑性・曖昧性）を生きぬく人材の育成（問題発見・解決力の育成）

〇学力観の転換（21 世紀型能力）
・基礎力：情報スキル　・思考力：問題発見・解決力、創造力、批判的思考力　・実践力：自律活動能力

〇失敗事例に見られた失敗の５つのポイント
・各校の伝統にこだわり死守しようとするノスタルジックな発想
・最後まで譲らず、創造的に考えて納得解を生もうとしない狭い各地域のエゴ、各学校のエゴ
・生徒のことを二の次にし、教職員・地域の大人の都合を優先すること
・共感が得られる優れたコンセプトを生み出せず議会、財政部局、地域住民を味方につけられないこと
・少子化でやむを得ない学校統合を理由にすること

【質疑応答・意見交換】（→回答：藤村教授）

・日本の労働生産性が非常に低い。これは大きな問題である。今は遅れを取っているが、これから先を見たときに、逆に世界に先駆けて日本がつくっていける要素があれば聞かせていただきたい。
　→日本の教育が劣っているとは考えていない。教師主導の一斉型授業は軍隊や工場をモデルにして明治時代から行っていたが、江戸時代は個別最適な学びを寺子屋で行っていた。子どもの良さを最大限に生かすという発想は、日本はもともと持っていた。日本人のこの民度は高い。協力して何かをやり遂げる、苦境にこそ打ち勝つ力があると考えている。

・屋代南高校は家庭科専門の校長が着任していることが多かった。学力観や授業観の上に立った専門性の確保という観点で伺いたい。統合によって専門性が薄れてしまうことはないか。
　→ライフサイエンス系があるのはとても貴重な事例である。専門性は絶対に大事であり、これを妥協すべきだと思っていない。しかし、今は専門性だけではダメとも言われている。専門性を深めつつ、みんなが力を合わせてもっと良いものつくる。その時にライフサイエンス系がハブ（結節点）になると思われる。今回の長野千曲総合技術新校は面白い可能性を秘めている。人事の話は、その時によって変わる。自分の専門だけでなく、他と繋げて考える。そのために、もっと専門を深めなければいけないという必然性を生むような学びをしている。総合技術新校の専門性は、もっと必要に迫られて深くなる。そして、リアルな追求をするので、表面的な知識・技能では追いつかない。だから、もっと良い学びができると考えている。

・先生が関わってきた先進的な５校は全て公立高校か。それとも私立高校か。また、それはいつ頃か。
→名古屋西陵高校と北海道札幌旭丘高校は市立で、それ以外は全部県立である。北海道札幌旭丘高校については約 20 年前。岡山県立倉敷鷲羽高校、名古屋西陵高校、宮崎県立小林秀峰高校は今も関わっている。 広島県立広島叡智学園はできて数年経つ。
・家庭科をハブとしていう話あったが、その場合、他の学科との学科連携を考えると、あれもこれも欲張りすぎて、逆に中途半端になる恐れはないか。
→カリキュラムを考えるとき、また教育内容を考えるとき、とても大事なのは本物を追求すること。教え込みでは予測困難なことに対する力や生き抜く力は育たない。そういった時にプロジェクトベースドラーニング（問題解決型学習）的なものを行い、そこに教科の内容、専門の内容がどう絡むのかを緻密に設計する。先進的な高校の例では鍵になるものをピンポイントで扱い、学びが深まるようにしている。あれもこれもやろうとすると失敗するというのは同意見。そのため、カリキュラムつくりが重要だと考える。
・学科連携をするとなると、人的環境や周りの環境の整え方が本当に大切になると思う。その辺のところをもう少し具体的に教えていただきたい。
→人的環境は大事である。 宮崎県の高校教育改革の場合、学校だけで教育を行わない。地域が子どもを育てる。学校の学びだけではなく、実際に動きながら考える。うまくいっているところは、地域が支え、保護者が支え、ありとあらゆるリソースを持ってくる。また、本当に最前線で頑張っている本物の大人が学校で授業をする。こういうことが普通にこれらの学校では行われている。人的資源は本当に大事である。１番大事な子どもの学びが質的に変わり、本物の探究になると思っている。
・市町村をまたぐ統廃合は非常に困難な面がある。その困難な状況に対してどのように対応してきたか。
→そこにどうしても学校を残したいという選択をするのであれば、在校生のほとんどがその市外や町外から来る。そういう政策をとらざるを得ない。そのための費用負担は自治体がせざるを得ない。自治体存続論が本当に子どもの学びを規定してよいかを最近考えている。学校がそこにあることが大事なのか、住んでる子どもたちが幸せになることが大事なのか、将来生きて幸せになっていける力をつけていけることが大事なのか、という問いを私たち大人は突きつけられてる。「すべては生徒のために」という考えで判断をできたら良いといったことを全国の状況を見て感じている。そのためには、とことん本音で議論することが必要だと思う。
・今言われた生徒のため、子どものためということを皆の心の中に植え付けていただければありがたい。
→すべては、「これは子どものためか」「子どもの将来のためか」という判断基準でお考えいただきたい。

【高校生の感想】
・統合とはどのような感じなのか思っていたが、専門科が一緒になることで新たに違った発想ができると思った。
・妹を同じ学校に通わせたいと思っていたので、統合は寂しいと思っていた。しかし、成功して学校が良くなるなら妹を是非そこに行かせたいと思う。
・最初はどうなるか不安であったが、取組事例があるということや大人がしっかり真剣に話し合うということで安心した、新校のことが楽しみになった。

その他

【再編基準の見直しについて】（→回答：事務局）
・再編基準の見直しについての報道があったが、詳しく説明してもらいたい。
→３月の教育委員会の定例会において、２期再編での令和５年度を初年度として適用することとしている再編に関する基準等について再検討すること、これに伴い令和６年度以降の本基準の適用を一定期間留保することを発表した。再編基準を策定するときには、ある程度の学級数等の学校規模がないと学びの保証ができないのではないかとしていた。しかし、コロナ過において、ＩＣＴ普及によるオンライン授業など、学び方が多様になってきたことや通信制高校を選択する生徒が増えており、昨年度開催した「特色ある県立高校づくり懇談会」において、「一学校主義を超えて県境校や小規模校でのオンラインを活用するなどのネットワーク化を図るのはどうか」、「想像以上に進んでいる少子化の中で、現行の再編基準等がこの形で本当にいいのか検討する余地があるのではないか」といった提言をいただき、再検討することとした。
今後は、その検討の場や、どのように発表するか、どのように検討するかも含めて検討を始めたところである。２期再編の統合を進めている各新校については、再編計画に基づいて進めていくが、再検討されたことの整合性について慎重に検討していく必要があると考えている。

【次回】
・日時：令和６年８月（予定）18 時～19 時 30 分
・会場：千曲市（予定）
・内容：学びのイメージについてのグループ討議（学校像・生徒像）

第３回長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会アンケートまとめ

１　藤村裕一教授の講演を聞いてのご感想

・家庭科がライフサエンスのハブになるという考え方や失敗事例についても参考になりました。しかし、特に地域に高校を残そうとする動きが私たちのエゴであるかのような話の進め方には疑問を持ちました。 ・前回の懇話会では、各学校ともこれまでの取組を発表し、地域とのつながりをアピールポイントとしてきました。各学校における地域の大切さ、あるいは地域における各学校の大切さを全員で共有できたはずです。子どもが学びたくなるカリキュラムは重要ですが、通学のしやすさや、地元に高校があることによって地元の子どもに生まれる学校愛・郷土愛もあります。また、先生が例にあげた自治体をまたいでの高校再編はレアケースであり、しかもそれは島根県の過疎地域であるとのこと。北信で長野市の次に人口が多い千曲市と単純に比較できないはずです。千曲市では８年連続で人口が社会増となっており、子育て世代が市内に住宅を求め転入している状況であります。 ・前回のアンケートでは家庭科の取り扱いについて農業科・工業科とは違うのではないかという旨の意見を申し述べました。今回の講演はまるでそのことを意識したかのように、新校では家庭科がハブになるとか、ワンキャンパス、地域より子どもの意見などと殊更に強調する講演に少し違和感を覚えたというのが率直な感想です。
・新校の学びとして、人的環境・物的環境は両面で整備していくことが必須。ライフサイエンスが新校カリキュラムの結節点となれば、新校の大きな特色となる等、大変参考になりました。 ・失敗事例のポイントの説明がありましたが、地域の状況も考慮に入れないと、地域との連携を大事にしていく上で矛盾するのではないでしょうか。その点が懸念されます。
・失敗事例の提示は、参考になるものであった。
・失敗事例には普遍的要因があると言われていますので、成功事例のお話以上に解説いただいた失敗ポイントは大変参考になりました。その中で挙げられたポイントが一つでもあれば失敗するとのご発言もありました。しかし、地域の状況を勘案すること無しの再編は将来に禍根を残す可能性も危惧されます。
・全国の動向を踏まえて長野県の高校教育の方向性についてご示唆をいただいたと思います。長野県が教育県であるという神話をやめて、これからの子ども達に何を求めるかにおいて、自分たちの教育観をアップデートする必要があることを理解しました。懇話会のメンバーが、藤村先生の講演を夢物語や絵空事のように考えているうちは素晴らしい人材の子ども達は生まれない、まずはやってみることが大事だと強く感じました。
・先進５校の状況について、新学習指導要領の改訂や学力観の転換などをふまえて、お話しいただき、意義深い講演でした。
・藤村教授の講演を拝聴し、高校再編への夢が広がりましたし、同時に柔軟な発想が必要だと思いました。当事者である生徒の意見を尊重し、大人のそれぞれの都合はすてるべきだと思いました。
・新校再編と聞くとガチガチなイメージでしたが、生徒のために大人が楽しい学校を楽しんで考えることとの講演に、これからの新校が楽しみになりました。
・「あそび心をもつ」いいなと思いました。「まじめ」なことと、「かたい」ことは違うと思います。あそび心が新しい発想をうみ出す。 ・学科間連携は、本当に夢がひろがりますね。 ・問題発見・解決能力 ・葉っぱビジネスのお話を聞きました。あのおばあさんたちは昔の教育をうけたはずですが、なぜ、あのようにタブレットをつかいこなし、年収 1000 万をこえるほど、かせげるようになったのでしょう。
・視点として、「大人がおもしろいことを考えよう」「遊び心をもって」は、とても参考になった。 ・失敗事例に見られた失敗の５つのポイントは、学校運営のポイントともなる。

２　講演をふまえた新校で育てたい生徒、新校の学校像についてのお考えをご自由にお書きください

・子どもたちが自ら探究心を持って学ぶこと、専門学科である以上、広く浅くではなく、ある程度深く学んでいけるカリキュラムが大切だと考えます。
・専門科目の学習を深めると共に、生徒の興味関心からの「問い」を大切にした探究学習を推進し、課題に向かう力をつけてほしい。一斉授業からの脱却が大切。 ・生徒を主語とした教育活動の実践を是非実現して欲しい。そこから、自ら課題を解決していく力が付き社会で生きる力に繋がっていくと考える。 ・地域と連携したディアルシステムの教育は必須。従って、地域の思いを活かした学校経営が大事になる。
・少子化等を大きな要因とする高校再編であっても、それを変化の好機と捉え、生徒たち、地域、産業界等から期待される軸を持った、これからの時代を担う高校をつくりあげる覚悟が必要と感じる。各論になった時に、軸がぶれてくると、成果が分かりづらいものになり、将来を担う人材の育成が難しくなる。

・藤村教授のお話にあった成功事例のように、生徒たちが主体的に楽しんで学べる環境を作ることが非常に重要だと思います。また、今の時代、教育に限らず多くの分野でAIを道具として活用することは必須です。AIを生徒たちに駆使させる教育は、新校に欠かせない要素だと考えます。 ・さらに、新しく総合技術高校として再編するのであれば、マイスターハイスクールの認定が取れるような高水準の学校を目指していただきたいと思います。そのためには、学校と地元の経済・産業界がより広く深く連携できる体制を構築してほしいと考えます。具体的には、企業とのインターンシップや共同プロジェクトの実施、最新技術の導入支援などを通じて、実践的な教育を提供することが求められます。須坂創成高校のような小学生を導く異年齢交流授業も取り入れることも生徒たちの興味をさらに引き出すことになると思います。 ・このような取組を通じて、生徒たちが自らの興味を深め、将来のキャリアにつながるスキルを身につけられる環境を整えることができるのではないでしょうか。
・情報機器などを上手に活用し常に新しい学びを生み出せる生徒を育てたい。そのためには、懇話会参加者も子ども達と同じように学び体験する必要があると思います。紙の配布物はやめて、常にデジタルをフル活用できる環境をつくりましょう。
・これまでの各校の特色をふまえて、良い意味での伝統や専門性を維持できる新校にしてほしい。教職員の専門性、研修の機会の充実面では、人事面でのご配慮をお願いしたい。
・失敗事例の５つのポイントをそれぞれが忘れずにして、社会に出て早い段階から戦力として働ける人材を育てる専門性の高い授業内容、実践を多くした授業を受けられる環境をつくってあげたいです。有力な先生であればオンライン授業で、学校でも、自宅にいても受けられるようにしてあげたい。生徒自らが授業内容を考えていけるアドバイスを先生にして欲しいです。
・生徒達の学ぶ学科がちがうと校舎自体が別になっていることが多く、生徒達の交流が無いため、交流が深まる学校ができるとよいと思いました。
・学科間連携が新校の「肝」だと思います。 ・各学校の伝統やこだわりを良い意味でのりこえていかないといけないですね。 ・誰をむいて新校をつくるのか、これが基本だと思います。楽しむ、夢をもつ、未来志向をもって、新校をつくっていきたいですね。
・子ども達に「どんな学校ができれば」という問いをなげかけることも必要と考える。 ・就職、大学入試というワクをはずすと、どんな学校ができ上るかと楽しみにもなる。 ・「ライフサイエンス」をキーワードとした学校づくりを考えるとワクワクした学校となるか。

３　その他

○懇話会の進め方について ・これまでの説明・講演を聞いて、各委員が自分の考えをまとめていく上で、質疑応答や総括的な意見交換の機会は必要不可欠です。アンケートと回答の配布のみで済ませ、次回、いきなりグループ討議に入るのは控えていただきたい。懇話会が形骸化しかねない。 ・ツインキャンパスである佐久平総合技術高校の話も聞かないと片面的・一方的な見方になるのではないでしょうか。佐久平は失敗だったのか率直に知りたいと思います。 ○再編基準の見直しについて ・なぜ急に見直されることになったのか、理解に苦しみます。そもそも県教委の高校再編基準こそが、藤村教授が言われる少子化のために再編をしようとしてきたものではないか、と疑問を持たれても仕方がないと思います。次回は明確な回答をお願いします。 ○更級農業高校の学科改編について ・新校の懇話会が始まった矢先に、なぜ更級農業の学科改編を認めるのでしょうか。このタイミングで認めても、総合技術新校に統合するならあまり効果的ではないと考えます。この点についても明確な回答をお願いします。以上から、次回いきなりグループ討議に入ることは時期尚早と考えます。丁寧な説明と意見交換の場を設けてください。一回の時間が短いなら回数を増やして対応して欲しいと思います。
・再編基準変更の説明で、「２期再編の統合（案）については進めていく。その際、再検討すると出ているので、再編整備計画との整合性、ここが非常に問われる」とのことでした。この点について、これからの懇話会での話し合いにも関わって来るので、その点を踏まえて、公平性が保たれるような対応策をお聞かせいただきたい。 ・信濃毎日新聞(5/12 付け)で、更級農業高等学校の学科編成再編の記事が掲載されました。このことについて、新校の学びを話し合う上で制約されはしないかと心配しています。次回の懇談会で学科編成再編理由について、ご説明をいただきたい。

○５月 18 日付け信濃毎日新聞の記事（再編基準の見直し）について ・懇話会の最後に佐野室長よりご説明がありましたが、本懇話会の対象校のように既に再編協議が進んでいる学校の扱いについて明確には理解できませんでした。協議は続けるものの今後、再編基準の見直しが進む中で、取り扱いが変わる可能性があるというニュアンスに聞き取れましたが、この理解でよろしいでしょうか？ ・仮にそうであるとすれば基準の見直しによっては振り出しに戻るかもしれない状況下での懇話会の今後の進め方を教えてください。 ・再編基準の見直しが行われるとしても、既に進行中の対象校については既定路線として再編を進めるということであれば、屋代南高校、更級農業高校、松代高校の３校は、基準見直しの要因が考慮されることなく再編されるということになります。 ・見直される部分があるとすれば、現状あるいは将来においての問題があるからだと思います。そのため、新校のあり方を討議する際には、これらの問題点によるマイナス面をしっかりと認識した上で行う必要があると考えます。 ・基準の見直しにおいて、当該３校に該当すると考えられる問題点で、既に予測が付いているものがあれば教えてください。 ○生徒たちにとって最も適した学校像を考えることは本懇話会に於ける主題でありサテライト・キャンパスを設けるよりもワン・キャンパスが望ましい環境であることも当然です。一方で、総合技術新校のあり方を考える際に、もし生徒の学びにとって最適な環境を追求するだけであるとすれば違和感を覚えます。確かに、学校は第一義的には生徒の学びの場ですが、学校が存在するかどうかは地域にとっても重大な問題です。３校の地域での現在の学校が無くなった場合のダメージの大きさは、校地を決める段階における比較検討の要素のひとつとなるのでしょうか？ もし県教育委員会での検討要素とはならない場合、学校を地域問題として所管する県の組織は存在するのでしょうか？　地域が活力を失い、高齢化と少子化が進むと、子供たちに適切な教育環境を整えることが難しくなるはずです。したがって子供たちの教育問題と地域の問題は不可分ではないかと考えます。
・懇話会のメンバーが目指すべき学校を視察する必要があると思いました。百聞は一見にしかずです。
・室長さんから「基準の見直し」について、ご説明ありがとうございました。これについては、去る３月の定例教委で決められたことですので、第２回の本懇話会（４月 25 日）にて室長さんからお話があってもよかった。
・会議への出席で、生徒数を増やしたり、構成員の人員の変更を検討して欲しい。

令和６年３月 26 日

『高校改革　～夢に挑戦する学び～　再編・整備計画』における「再編に関する基準等」の再検討について

高校再編推進室

令和５年度を初年度として適用することとしている「再編に関する基準等」について再検討することとする。このことに伴い、令和６年度以降、本基準の適用を一定期間留保する。

「再編に関する基準等」策定の考え方

・平成 29 年策定の「学びの改革　基本構想」では、「中山間地が多く、県土が広い本県の地理的特性を考え、市街地にも中山間地にも高校が存立し、それぞれの高校の特徴を活かして『新たな社会を創造する力』を育むことが望ましいと考える」とした
・その上で、このような立地の特性を活かした高校づくりを進めるために、「都市部存立校」は一定の規模が維持できるように、また「中山間地存立校」は可能な限り存続できるように、都市部と中山間地で異なる基準を設けることとした

提案に至った理由

・ＩＣＴの活用による遠隔授業や合同授業など、学び方が多様になってきていること
・想定を上回る少子化の進行や通信制高校を選択する生徒の増加等により、中学校卒業者総数に占める公立全日制高校進学者の割合が減少傾向にあること
・これらの状況から、再編基準をこのまま継続して適用していくことの妥当性に対して県教育委員会として課題意識を持つに至ったこと
・今年度５回にわたり開催した「特色ある県立高校づくり懇談会」の場において、構成員から、「一学校主義を超え、例えば県境校や小規模校ではオンラインを活用するなどしてネットワーク化を図るのはどうか」、「想定以上に進んでいる少子化の中で、現行の再編基準がこの形で本当にいいのか検討する余地があるのではないか」等の意見が出されたこと
・県議会においても、再編基準の見直しや今後の高校のあり方などの検討を求める意見が出されたこと

考えられる論点

・現行の再編整備計画で示した望ましい学校規模
・再編基準に該当した場合の選択肢
・現行の再編整備計画との整合性　など

今後の進め方

・検討の場の設置を含めて検討

（参考）「再編に関する基準等」　裏面＜別紙＞のとおり

高校改革　～夢に挑戦する学び～　再編・整備計画【三次】　（抄）　＜別紙＞

２　再編に関する基準等について

１「都市部存立普通校」の基準について

○募集定員 240 人以上が望ましく、さらに規模の大きさを活かせる募集定員 320 人規模の学校の設置も目指す。
○規模が縮小し、在籍生徒数が 520 人以下の状態が２年連続した場合には、再編対象として、①他校との統合（新たな高校をつくる）、②募集停止のいずれかの方策をとる。

２「都市部存立専門校」の基準について

○募集定員 120 人以上が望ましい。
○規模が縮小し、在籍生徒数が280人以下の状態が２年連続した場合には、再編対象として、①他校との統合（新たな高校をつくる）、②募集停止のいずれかの方策をとる。

３「中山間地存立校」の基準について

○募集定員 120 人以上が望ましい。
○在籍生徒数が 120 人以下の状態、もしくは、在籍生徒数が 160 人以下かつ卒業生の半数以上が当該高校へ入学している中学校がない状態が２年連続した場合には、再編対象として、①他校との統合（新たな高校をつくる）、②地域キャンパス化（分校化）、③「中山間地存立特定校」の指定、④募集停止のいずれかの方策をとる。

４「中山間地存立特定校」の基準について

○地域との協働を「中山間地存立校」を適用した学校よりもさらに強化することにより、募集定員 40 人でも単独で高校を存続させる道を探る。
○次の条件をすべて満たす高校は「中山間地存立校」の基準に該当した場合であっても、その例外として「中山間地存立特定校」としての指定を検討する。
（ア）県境に近い地域で、近隣の高校と著しく離れている。
（イ）教育機会の確保の観点から高校の存続の必要性が高いと判断できる。
（ウ）所在する市町村等、地域からの支援を得ながら、高校を単独で存続する体制を整備できる。

５「地域キャンパス」及び「中山間地存立特定校」がより小規模になった場合について

○在籍生徒数が 60 人以下の状態が２年連続した場合には、募集停止を検討する。ただし、卒業生の半数以上が当該高校へ入学している中学校がある場合や、将来、入学者の増加が予測される場合は慎重に扱う。なお、在籍生徒数は、地域キャンパス化から３年が経過、もしくは「中山間地存立特定校」の指定から３年が経過した時点以降の生徒数とする。

注１）再編に関する基準等については、令和５年度を初年度として適用する。
注２）この基準の「在籍生徒数」は、学校基本調査に基づく５月１日現在の数とする。

令和６年（2024 年）８月 27 日

『高校改革　～夢に挑戦する学び～　再編・整備計画』における「再編に関する基準等」の再検討について　（案）

高校再編推進室

１　検討の場について

（１）県教育委員会事務局、高等学校校長会、中学校校長会で論点を整理し原案を作成

（２）外部の有識者及び各団体（市町村会、市町村教育委員会、保護者、教職員、産業界）に対して原案を提示し、各団体内で議論いただく

（３）有識者及び各団体の代表者に参集いただき、対面またはオンライン（ハイブリッド）による検討会議（仮称）を公開で開催し、意見を聴取する　　※オンライン同時配信

（４）外部との意見交換を踏まえた修正案についてパブリックコメントを求める
※中学校、高等学校にも依頼し、中学生、高校生の意見も合わせて求める

２　今後の進め方

「特色ある県立高校づくり懇談会」のまとめを受けた教育委員会方針との整合性を図るため、方針の公表後から原案作成に入る

① 県教育委員会事務局、高等学校校長会、中学校校長会で論点を整理し、原案を作成
外部に対して協力依頼

② 外部に対し原案提示

③ **第１回検討会議（仮称）開催**（有識者及び各団体代表者参集、公開で開催）
有識者、市町村、市町村教委、保護者、教職員、産業界から意見聴取

④ 第１回検討会議の結果を踏まえ、修正案を教育委員会定例会に提案
パブリックコメント実施

⑤ パブリックコメント集約

⑥ **第２回検討会議（仮称）開催**（有識者及び各団体代表者参集、公開で開催）
パブリックコメントを含めた最終案を提示し意見交換

⑦ 教育委員会定例会に「再編に関する基準等について（改訂版）」を提案

⑧ 「再編に関する基準等について（改訂版）」を公表

令和８年度からの適用を目指す

※現在進行中の「再編・整備計画」及び「特色ある県立高校づくり懇談会まとめ」との整合性に留意しながら慎重に進めていく

長野県教育委員会定例会(2024.6.11)資料(抜粋)

高等学校の学科改編について

高校教育課

１　学科改編について

県立高等学校においては、平成 30 年９月に策定した「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」により、「新たな教育の推進」と「新たな学校づくり」に一体的に取り組んでいる。

こうした改革の状況を踏まえ、また、各校の教育課題に対応した探究的な学びをさらに推進するため、要望のあった下記の２校について、長野県立高等学校管理規則第２条に定める学科の改編を行う。

２　実施時期

令和７年４月１日

３　改編内容

（１）改編対象

①更級農業高等学校　全日制

改編前

大学科名	小学科名
農業科	生　産　流　通　科
	生　物　科　学　科
	グリーンライフ科
	施　設　園　芸　科

→

改編後

大学科名	小学科名
農業科	地 域 園 芸 科
	植 物 活 用 科
	食 農 科 学 科

②下伊那農業高等学校　全日制

改編前

大学科名	小学科名
農業科	アグリサービス科
	農　業　機　械　科
	園芸クリエイト科
	食　品　化　学　科

→

改編後

大学科名	小学科名
農業科	栽 培 科 学 科
	地 域 資 源 科
	生 物 活 用 科

（２）新学科の概要

①更級農業高等学校　全日制

学校名	新学科名	新学科の概要
更級農業	地域園芸科 植物活用科 食農科学科	１　改編理由 　更級農業高校は、「生産流通科」「生物科学科」「グリーンライフ科」「施設園芸科」の４学科８コースを設置し、地域農業及び地域産業に主体的・創造的に貢献できる人材の育成を目指している。 　近年、産業構造の変化に伴い農業は大きく変化している。農業法人の増加や集団営農による大規模化が進む一方で、兼業農家等の小規模農家の離農やそれに伴う耕作放棄地が増加しており、長野市近辺でも休耕田がみられる。農業経営においても大規模データの活用やドローンやロボットなどの農業機械の導入等、農業のデジタル産業化（スマート農業化）が進んでいる。 　一方、都市部にある本校に入学してくる生徒は多様化しており、将来、家業の農業後継者を目指して入学してくる生徒は少なくなっている。本校は高校再編整備計画に該当しており、総合技術高校への統合に向けて懇話会が始まっているが、将来は再編により旧第４通学区唯一の専門教科を学ぶ高校となり、幅広い学力層の生徒が入学することが予想され、多様な進路への対応が必要となると考えられる。 　そこで、「探究学習」や「幅広い横断的な学び」及び「地域と協働した学び」ができる農業科の教科特性を生かした教育課程を構築し、下記２のように生徒の育成を目指し、学科を改編したい。 ２　育成したい生徒像 「地域農業及び地域産業に主体的・創造的に貢献できる人材の育成」 (1)　「農業を学ぶ」ことにより、社会変化に柔軟に対応し持続可能な農業及び地域産業を支える人材 (2)　「農業で学ぶ」ことにより、多面的で汎用的な力を身に付け、将来農業分野のみならずその他の地域産業での就職や起業において、競争力を持った人材 (3)　「農業に学ぶ」ことにより、自らの生き方や地域社会の在り方を考え、自分自身と地域社会のウェルビーイングを実現できる人材 ３　学科の内容と学びの特徴 (1)　地域園芸科 　更級地域の農産物（果樹・野菜）を教材として、地域農業の課題を解決できる知識と技術を習得する。ＧＡＰやスマート農業についての学習を取り入れ、科学的根拠に基づいた課題解決能力を身に付け、農業や関連産業の発展に寄与できる人材を育成する。 ○　ベジテックコース 　野菜生産について環境制御システムなどスマート農業を取り入れた専門的な知識や技術を習得するとともに、地域伝統野菜を活用した地域交流について学ぶ。

		○　フルーツテックコース 　ビッグデータ活用やＧＡＰを取り入れた、フルーツ王国長野の果樹生産に関する専門的な知識や技術を習得するとともに、市民農園の交流活動を通した果樹園運営について学ぶ。 (2)　植物活用科 　更級地域の主たる農産物（米、草花）を教材として、栽培だけでなくその活用方法についても学習する。農業の多面的機能を活かした自然環境・生活環境の質向上に寄与する活動を通して、地域の課題を解決できる人材を育成する。 ○　フラワーデザインコース 　草花栽培やその活用に関する知識と技術を学び、草花と人の関わりを通して生活環境の質の向上を目指し、地域の活性化へつなげる学習に取り組む。 ○　アグリデザインコース 　米を中心とした穀物栽培の技術や知識を学ぶとともに、自然環境や景観の保全に関する学習として地域の棚田を活用し、農業の多面的機能を生かすための学習に取り組む。 (3)　食農科学科 　食品を教材として、原材料の生産から加工・分析・流通・販売に至るまでの生産管理及びビジネスについて総合的に学習する。持続的・効果的に地域資源を活用できる経営感覚を身に付け、地域産業の発展と活性化に貢献できる人材を育成する。 ○　フードサイエンスコース 　食品の製造・分析・栄養及び食品衛生に関する専門的な知識や技術について学ぶとともに、実験を通して科学的な視点を養い、表現力・データに基づく論理的思考力の向上を目指す。 ○　フードビジネスコース 　食品の製造・販売を通して、生産物に新たな付加価値を与えるための知識や技術を学ぶとともに、地域の農産物を活かした加工品の開発を通し、地域の農業及び食文化の振興について学ぶ。

令和7年度　長野県更級農業高等学校【新しい学びのカタチ】

くくり募集
３学科６コース

地域園芸科
食農科学科
植物活用科

NEW

農業

を学ぶ …地域産業を支える人材育成
で学ぶ …多面的なチカラを持つ人材育成
に学ぶ …地域社会のミライを考えられる人材育成

輝農（こうのう）で、たがやせジブン。高めろジブン。

- 菜 ベジテックコース
- 果 フルーツテックコース
- 花 フラワーデザインコース
- 穀 アグリデザインコース
- 産 フードビジネスコース
- 食 フードサイエンスコース

期待される生徒像

①目的意識がある！
②多面的なチカラを身に付けたい！
③地域の産業に貢献したい！

１年次／基礎
- 農業の基礎学習
- 基礎学力の定着
- 学ぶ姿勢の確立

２年次／発展
- コースの専門学習
- 自ら探究し、情報をまとめる学習

３年次／挑戦
- 地域と協働した研究
- 進路実現に向けた主体的選択力の育成

第1回　長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ

日　時	令和６年１月 11 日（木）18 時 00 分～19 時 30 分		
場　所	篠ノ井総合交流センター		
出　席 **（敬称略）**	西澤雅樹、丸山陽一、小川修一、小松信美、塚田常昭、市川伸一、福田享士、矢島隆生、滝沢秀治(オンライン)、森下孟、藤本光世、尾島信久、香山篤美、赤地憲一、越正至、細川隆男、赤塩曜子、大平芳春、吉澤多恵子、唐木文子、宮尾昭広、宮原明人、倉島さつき、杉﨑太一、武藤穣、武内伸之、松澤友希、藤澤由夏、宮林正樹、大橋一華、竹内宏枝、肥田尚音（以上 32 名）		
欠　席 **（敬称略）**	牧政史、齋藤智恵美（以上２名）	**傍聴者**	34 名（オンライン４名含む）　マスコミ６社
事務局	更級農業高校	垂澤教頭、武内教諭、石澤教諭	
	松代高校	丸山教頭、宮林教諭、中澤教諭	
	屋代南高校	宮嶋教頭、肥田教諭、土屋教諭	
当日資料	次第、構成員名簿、席図、開催要綱、今後のスケジュール（案）、パワーポイント資料		

会議事項

（１）座長選出　　◎藤本光世構成員を座長に選出
（２）「高校改革～夢に挑戦する学び～」について（県教委より説明）
　①実施方針　②再編・整備計画【三次】　③長野千曲総合技術新校の学校像（例）
（３）質疑応答及び意見交換

構成員から出された主な質問・意見（要旨）　（→県教委回答）

〇懇話会開催趣旨について
・役職で選ばれている構成員は、役職を交代したときでも継続していくのか。
→役職により参画いただいた方は、交代された次の方に引き継いでいただく。
〇「高校改革～夢に挑戦する学び～」について
・旧第４通学区の中学卒業者数推移において 2030 年から 2038 年にも急激に減っているが、これは全県的なものか。
→旧第４通学区は比較的人口集積が進んでいる地域である。一概には言えないが、全県的な傾向であると言える。
・松代高校の普通科だけが残り、屋代南高校の普通科は新校になるのはなぜか。
→千曲川の東岸地区にも県立高校の学びの場を残しておきたいとの考えからである。今回の総合技術高校の構想を実現するにあたっては、旧第４通学区における商業科は松代高校に所在しており、各学校に所在している農業科、家庭科、屋代南高校普通科の統合の中で新しい時代にふさわしい学校を作っていくべきではないかと計画した。
・旧第４通学区の地域協議会では、多部制単位制高校の設置を求めるというまとめであったが、この懇話会でも多部制単位制の意見交換ができるのか。
→多部制単位制高校の配置を各４地区に１校と考えている。北信地区では旧第３通学区の長野東 SF 新校を多部制単位制高校としている。この懇話会では長野千曲総合技術新校の学びについて意見交換していただきたい。
・総合技術高校になることで幅広い進路が得られるということは良いことだと思う。
・新校での学びの内容が決まったところで校地を決める、懇話会の中で一緒に考えるとの説明があり安心した。
・長野千曲総合技術新校の学校像では、総合技術新校で学び、その結果として地域社会、産業に新たな価値を生み出すイノベータを育成していくと示されている。地域の弱体化が進んでいることから、それに真正面から取り組んでいく学科や科目を取り入れていただきたい。
→次回以降、学校像について現状の更級農業高校、松代高校、屋代南高校でのそれぞれの学習活動や学校の取組を学ぶ中で、相互理解を深めて、新たな学校でどんなことができるか、どんな学びを作っていこうかといった、意見交換を本格化させていただきたい。その中で、いただいた意見を踏まえて議論ができるようにしていきたい。
・これまでの学習を超えて、主体的、深い学びに変わっていくという説明を聞き、生徒自身が意見交換をして地域をどう変えていくか、高校生の力でできることを生徒自ら話し合い、行動していける場が増えていく、実際増えていっているということが良いと感じた。
・それぞれの高校で大切にしている学びの理念をそのまま残して、新しい学校をつくってほしい。
・生徒にも懇話会の内容を提供してもらえれば、生徒自身が理解し、これからの社会をどうしていったらよいのか、自分自身が考えるきっかけになる。生徒の意見を大切にしていってほしい。
→次回以降の懇話会では、各校の取組を生徒の皆さんから直接発表してもらい、相互理解を深め、情報共有していただきたい。自分たちは今の学校で卒業して、新しい学校になるのは数年先だとしても、愛する母校の精神が引き継がれる中で、新しいものを生み出していってほしいという願いをしっかり受け止め、学校像での意見交換の中で役立ていきたい。

その他

【次回】
日時：令和６年４月 25 日（木）18 時～19 時 30 分
会場：千曲市役所　会議室
内容：総合技術高校について、各校生徒による学校・学びの紹介

第2回　長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ

日　時	令和６年４月 25 日（木）18 時 00 分～19 時 30 分		
場　所	千曲市役所　301 会議室		
出　席 **（敬称略）**	西澤雅樹、小川修一、小松信美、塚田常昭、福田享士、矢島隆生、滝沢秀治、森下孟、藤本光世、坪井俊文、赤地憲一、越正至、細川隆男、赤塩曜子、小田切勇、宮澤洋介、山﨑みさ子、吉澤多恵子、唐木文子、宮尾昭広、中野禎仁、倉島さつき、武田拓斗、武藤穣、徳武晃、今川千桜、向井健太郎、宮林正樹、伊藤七菜、竹内宏枝、肥田尚音（以上 31 名）		
欠　席 **（敬称略）**	丸山陽一、市川伸一、海野忠一、香山篤美（以上４名）	**傍聴者**	35 名（オンライン４名含む） 報道関係５社
事務局	更級農業高校	丸山教頭、徳武教諭、石澤教諭	
	松代高校	阿部教頭、宮林教諭、坂本教諭	
	屋代南高校	櫻田教頭、肥田教諭、土屋教諭	
当日資料	次第、構成員名簿、今後のスケジュール、講演資料、学校紹介資料		

会議事項

（１）第１回長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会まとめについて
（２）講演「総合技術高校における学びについて」講師：須坂創成高等学校　羽山功校長
（３）各校生徒による学校・学びの紹介
　①更級農業高等学校　②松代高等学校　③屋代南高等学校

講演会概要・質疑応答（要旨）（→回答）

【須坂創成高等学校　羽山校長の講演】

〇学校概要

・「専門力と創造力を有する地域の産業の担い手を育成するため、産業教育の全てにふさわしい学校・学科を」というニーズから、須坂園芸高校、須坂商業高校を統合し 2015 年に開校した。
・学校は、須坂駅（長野電鉄）から徒歩５分ほどの位置にあり、長野市から多くの生徒が通学している。地元の須坂・上高井の生徒 39.5%に対して、長野市の生徒は 53.6%である。
・農業科３学科７コース、工業科（創造工学科）２コース、商業科３コースに分かれてそれぞれの専門的な学びに励んでいる。
・商業科では、会計コース 90 名、ＩＴコース９名、マーケティングコース 16 名と大きな開きがあるが、人数調整等を行わず、生徒の進路に応じたコース選択をしている。
・工業科では、生徒全員がデュアルシステムで地元の企業に行っている。生徒が一生懸命取り組んでいるため企業側は須坂創成に良い印象を持っていて、工業科が学校の就職を引っ張ってくれている。地域のいろんな方々がバックアップして、応援組織を作り、受け入れていただいている。地域に支えられていることを実感している。
・進路指導においても、学校には工業の先生、商業の先生、農業の先生がいることで、違う学科の生徒をそれぞれの学科の専門の先生が指導できることが、ある意味統合技術のメリットである。

〇学科連携

・１年次では各科共通履修科目の「産業基礎」で地域のことを学び、２年次には互いに乗り合わせしながら専門分野の協働的な学びをとおして専門性を身につけている。
・３年次の「課題研究」を３科同じ曜日・時間帯に授業を行っている。１つのテーマにそれぞれの学科の生徒がいて、３学科の職員が担当している。
・通常の高校は他校に出向かなければ他科との連携を行うことができないが、総合技術高校であるため生徒や先生がその場にいることで効率よく連携や交流を行うことができている。
・須坂創成高校が開校時に校舎が完成していなかったため、年次統合であった。須坂園芸高校、須坂商業高校のそれぞれの校舎を使用していたため、学科連携は教員がそれぞれの場所に行って授業を行っていた。それでは、生徒同士の交流はなく、総合技術高校の意味は薄まってしまったと感じている。
・2019 年から教育課程の見直しを始めて、2022 年の新入生から他科の授業を互いに担当したり、乗り合わせの授業を行ったりするように教育課程を変えた。
・総合技術部会研究会（県内の総合技術高校３校の教員が年１回、互いの学校を視察、意見交換を行っている）の中で、飯田ＯＩＤＥ長姫高校では連携科目について「この学科では生徒にこういう力をつけたいので、こういう科目を設定してほしい」と生徒目線で科目を設定しているということの説明があり、刺激を受けて教育課程が変わってきた。
・それぞれの専門学科だけでは学べなかったり、気づけないようなことが、連携することでのメリットであると考えている。
・「創成フェア」も３学科でやっている。そこにも森上小学校の生徒に来てもらって、売るところまで体験してもらっている。違う知識を持っている人たちが集まるから、いろいろなアイデアを出せるというのが、総合技術の強みである。
・資格取得も乗り合わせを行っている。自分の専門以外の資格取得も可能であるが、専門的な資格では乗り合わせができていないものもある。
・生徒は、地元に愛されているっていうことを実感しているので、県外に進学しても地元に帰ってくる生徒が多い。

○須坂新校の開校に向けて
・須坂創成高校と須坂東高校を統合し、須坂新校を令和11年度に開校する。須坂創成高校の敷地を使用することで決定している。
・現在は、両校で部活動や文化祭に相互に交流を進めてくことになっている。
・令和８年度ぐらいにはクラスマッチも一緒にできるように進めている。
○質疑応答
・２キャンパスや３キャンパスということを聞くが、須坂創成高校の形態はどうなのか。また、新校ができた場合はどういう形が予想されるのか。
→・須坂創成高校は１キャンパスである。ある学校では２キャンパスであるが部活は１つであるのでバスで移動しなければならず大変であるとの話を聞く。
・須坂創成高校の年次統合時には２キャンパスの形となっていた。弊害があったというのはお話したとおり、２キャンパスであると生徒が普段の交流ができない、しにくいことから、須坂新校は１キャンパスと思っている。
・総合技術部会には３校あるということであったが、総合学科部会というものもあるのか。あるとすれば何校あるのか。
→・校長会の中に総合技術部会があり、総合技術高校３校と農業、工業、商業、家庭福祉の部会長で会議を行っている。同様に総合学科高校６校の総合学科部会がある。

【各校生徒による学校・学びの紹介】
①更級農業高等学校
・生産流通科（生産技術コース・流通経済コース）では、主要作物の栽培方法や日本農業の根幹である稲作生産を題材に農業生産技術について学習している。
・生物科学科（食品科学コース・環境科学コース）では、農産物を主原料とした食品製造技術や生活環境から地球環境まで幅広い分野の科学的分析や環境保全を学習している。
・グリーンライフ科（アグリネットワークコース・園芸デザインコース）では、農業がつなぐ様々な交流を広げ、活力のある農業を築くことや、様々な鉢物・草木の栽培に必要な知識や技術を学んでいる。
・施設園芸科（施設野菜コース・果樹科学コース）では、水耕・温室栽培、スマート農業の先端技術や果樹栽培の専門的な栽培方法を学習している。
・課題研究発表会では、学習や研究の成果を発表し、対話的な探究学習に取り組んでいる。
○質疑応答
・稲荷山養護学校との交流があれば、教えていただきたい。→・コースの中で交流している。

②松代高等学校
・「総合的な探究の時間」では、１年次に松代町について学びを深める「松代ブラ散歩」を実施している。松代の歴史や文化、魅力を掘り出す学びについて先生方がコーディネータとなり、地域の方々に講師としてご協力いただき、地域の資源（人・もの）を結びつけた学びを行っている。
・「課題研究」では、松代町商店街の活性化について研究している。ホームページなどを活用した広報活動に注目し、町内の商店を取材し店の魅力や特色ある商品をWeb上で紹介する「マイマップ」を作成している。松代高校ホームページとリンクして商店街の活性化のお手伝いや、長年企業とコラボした開発商品販売から地元の休耕地を利用して、開発商品に必要な食材を育てる取組も始めた。後輩への研究を引き継げるような発表会を実施している。
○質疑応答
・地域と密着して学んでいることが分かった。生徒の皆さんにとって地元の街はどのような存在か、教えもらいたい。
→・松代町に入った瞬間に景色が変わり、昔ながらの感じがして、非常にそれがいいと感じている。
・松代の街のお店の方が、とても優しくて、とても親切に接していただいていて、街が大好きである。

③屋代南高等学校
・普通科、ライフデザイン科（ファッションデザインコース・フードデザインコース）がある。
・ファッションデザインコースでは、各種デザインコンテストへの参加や資格取得への積極的な取組をしている。
・大学や企業と連携した学習にも積極的で、課題研究や発表につながっている。
・フードデザインコースでは、様々なコンテストへ参加し長野県産の食材を用いたコンテストにおいて文部科学大臣賞を受賞するなど成果をあげている。
・専門的な技術は各分野のプロフェッショナル講師陣に指導していただき、高度な技術を習得するため一人ひとりが目標をもって学んでいる。

【その他・要望】
・各校の学びについての理解はできた。
・新校について質問を用意してきたができなかった。次回は、是非質問の時間を設けてほしい。

その他

【次回】
日時：令和６年６月10日（月）18時～19時30分
会場：篠ノ井総合交流センター　多目的ホール
内容：アドバイザーによる講演

第２回長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会アンケートまとめ（抜粋）

１　羽山校長の講演を聞いての感想

（１）学科

・総合技術高校には工業科が必要だと感じた。工業科がないと総合技術高校として不十分になるおそれがある。特に農業科との学科連携に必要不可欠ではないか。
・長野千曲総合技術新校も工業科の取入れが必要と感じた。
・作る（農業）と売る（商業）。違う知識を持つ者が集まるのが総合技術高校の最大のメリット。生産から流通までをマネジメント。

（２）学科間連携

・農と工・商との学科連携のイメージは良く分かったが、家庭科特にライフデザインとの連携のイメージが湧かない。学科連携の重要さは分かる。
・生徒が学びたい内容に従って、他の学科や専門分野に跨いで学べることは大変素晴らしい。それだけ先生方の専門性を高めることができると期待され、総合技術高校になるメリットは、教諭・生徒ともに大きな意義がある。
・学科間の連携により、他学科の知識を学習し、より広い専門性を獲得することができることは、生徒の希望に即した進路実現につながる。入学の時点と高校生活を送る中とでは、生徒の希望も変わることがあるため、それにも対応できるシステムだと思う。
・各学科相互乗り入れで、経験の幅を広げられるのは、とても良い。
・学校連携は確かに、大変なメリットだなと思った。お互いの長所を活かせることが強み。
・生徒の学びが横断的になっている。それを職員が支えている点がとてもよい。
・専門学科が互いに理解し補うことで学んだり経験したりしとても良い。

（３）地域・企業との連携、デュアルシステム

・地域連携、デュアル研修の積み重ねが地域を愛する気持ちが醸成される。このことは新校でも必要な大事な視点である。
・須坂創成高校の良さはデュアルシステムにあり、幅広い実践的な学び、主体的に個別な学びに取り組めるところにあると思われる。千曲新校においても、探究的・創造的に個々が学ぶことにより、自分たちの可能性をさらに高め拡げることができるのではないか。
・デュアルシステムを活用し地域の高校としている点も大変納得感があり、生徒自身にも可能性に挑戦する上で大変有効であると感じた。地域にも大いに受け入れられていると感じた。
・地域のささえが必要。
・地域企業との連携が生徒の地元愛を育んでいるのだなと感じた。

（４）学び

・生徒目線で学びをコーディネートしていることも評価できる。
・いろいろな資格を自校で学べることが、高校生にとってとてもいいことだと思いました。生徒の幅を広げることができると思います。

（５）校地・キャンパス

・校地の立地の良さ（交通の便の良さ）が生徒募集に重要であると再確認できた。
・ワンキャンパスが理想的に思えた。
・農業、商業、ライフデザインを単純に合体させて一校・一校地にすることには無理がある。

２　生徒による各校の学校・学びの紹介を聞いての感想

（１）更級農業高校

・高校段階から積極的に生産活動に力を入れており、実生活・実経済に基づく学びがなされている。
・コースの多様な学びが分野間の学びに相互作用しており、実践的で主体的な学びを構成している。
・それぞれの学習活動を通じて、どのような学びがあったのか、その学びを通じて自分たちの将来にどのような影響を果たしているのかを話してもらえるとなおよかった。
・資格取得や即戦力を目指して学んでいる点が強調され、生徒の目的がはっきりしていると感じた。色々コースがあり選択の幅が大きいことも強みと感じた。

・自然と接し作物の収穫に喜びを感じることが生徒にとって励みになっている様子が伺えた。
・４つの科の中にたくさんのコースがあり、様々な知識・技術を高いレベルで学んでいると感じました。

（２）松代高校
・地域交流を大事にして地域に根差した学校風土ができていることを感じた。
・高校生だからこそのアイデアを活かして、地域にある学校としての機能を果たしていることがわかった。
・生徒の声から学校を通じて学び得たこと、自分のキャリア形成に大きな影響を与えていることがわかり、地元密着型の高校としてのあり方を学ぶことができた。
・地域の高校という生徒の認識が強いと感じた。これは松代地域の方の想いでもあると感じる。反面、地区外から通っている生徒が多いことが意外であった。
・ネットによる店舗紹介が高校の HP から見ることができることは素敵。松高カレーDX はおいしかった。地元と密着していて地域も元気になる。

（３）屋代南高校
・伝統的な取組の深さに興味を持った。
・「被服」という観点から大学や企業、地域など多様に交流を持っており、高校での学びを通じた専門性の高さを感じた。
・「食品」において、様々なイベントを通して自分の特長を表現し、即戦力となる技術力や自信を持つことができており、高校生とは思えないレベルの高さに驚かさた。
・大学進学希望者の受け皿として 27 名以下の学級で構成されていることに驚いた。丁寧に指導が行き届いていると感じた。
・ライフデザインコースは地域の企業やアパレルメーカーなど、外部とつながっていることが素敵。フードデザインコースは、コンテストに挑戦し、外部の評価をうけ入れ技術を高めている。

（４）学科
・ライフデザイン科は技術を学ぶとはいえ、芸術・文化的な要素が強く、実際独自の発展をしている。農業・商業・　工業と学科連携しにくいのではないか。
・商業科と普通科の違いがさほど感じられなかった。
・どの校も地域に根付いた学びをしている。全ての科が残せれば良いと思った。

（５）地域
・各校すべて地域と深く関わっており、切り離してしまうことは相当困難である。
・３校の実践発表は、生徒自らの課題を探究的に学習していく上で、地域との連携をとても大事にした取組であった。
・地域を学び地域から学ぶ姿勢は、体験から学ぶことが多く、必ず生徒の力になるので、今後も継続して取り組んでいってほしい。
・地域との繋がりを考えた活動、教育が実施されている。
・松代高校、屋代南高校の地域とのかかわりについて、とても興味深きものがありました。

（６）新校に向けて
・３校の活動には、それぞれ特徴があり、統合によって、それらの活動がどんな融合を図るのか、どんな進化をするのか楽しみ。
・総合技術新校が生徒たちの成長にとって従来以上に相応しいものになってほしいとの想いを新たにした。
・新校では地域密着型の「探究」的な学びに重視して、学科を越えた生徒間での主体的な学び合いができること、そのなかで自らの専門性を高められることが生徒たちのニーズにあるのではないかと実感した。
・各校、地域との交流、協働して連携している姿があり、それぞれの学校が地域と密接した関係が構築されていてとても良い。それぞれの学校の持ち味を残した新校ができると良いと思う。

（７）広報・アピール

・今回の発表を、中学生の体験入学の折にも実施して、学校の魅力をアピールしてほしい。
・せっかくの良さが地域に知られていないのではないか。これからの時代、情報発信のあり方を考える必要があり、新校においては情報発信に力を入れた活動、教育活動が行えるとよいのではないか。

３　新校で育てたい生徒、新校の学校像

（１）学科

・総合技術高校なら工業科必須。工業がなければ不十分。
・ライフデザイン科の学びをどう考えるか。
・福祉やデジタルなど新たな学びをどうするか。
・総合技術新校として農、商、ライフデザインと合わせて工業科も取り入れてお互い連携ができる授業体制が必要。

（２）学校像

・３校の特色ある学びは新校でも引き続き取り入れ、更に深く専門的な学びになることを期待する。
・これからは、どの学科でも情報を駆使した教育課程が編成されることを期待する。
・多くの学科を要する総合技術新校において、生徒の希望する多様な学びに対して、対応できることが大きな魅力となる。普通科では対応できないことにも、チャレンジしていきたい。
・１人１台情報端末とクラウドを活用した個別最適な学び。
・先端テクノロジーと STEAM 教育の理念に基づいた協働的で共創的な学び。
・生徒とともに教師が育つ学校、教師の専門性を活かした教育課程の開発。
・旧第４通学区を代表する高校になってほしい。地域に歓迎され、愛され、生徒の夢の実現に貢献できる学校。
・高校は社会に出るに当たっての様々な学びができる場所であり、貴重な経験と思考が前向きにできる場所であってほしい。
・これから先の将来、AI の技術では成し遂げられない、人間力が学べる学校をつくって欲しい。
・人と人が繋がる事の大切さも重視し、コミュニケーション能力、自分で考えて動ける人間を保護者と一緒に育んでいける学校にして欲しい。
・専門性＋αの学校にしてほしい。様々な科のある高校です。たとえば、農業専門＋（商業の知識や工業の知識も少しある）　生徒の幅を広げることができる学校にしてほしい。
・地域企業との関係を強め、地域企業への就職に強い学校（生徒がこの地域に残ってくれる、または帰ってきてくれる学校）。
・教員が横断的に関わる、地域・企業がささえる学校。
・屋代南高は、交通の便が極めてよいので、家庭科と新たな学科（例えば福祉科）を新設することにより、広範囲に多くの生徒の学びの場として新たな展開が期待できる。２キャンパスでも十分やっていけるのではないか。リモートも活用しながら、新校と一体となった特色ある高校になる。
・地域との連携が大切である。各校が今から連携して子供たちのための新校を開校するよう努力していくことが重要である。
・大学、専門学校に進学しなくても新校で学んだことが即、実社会で通用することのできる体制づくりの魅力がアピールできれば入学してくる生徒の目標になる。

（３）生徒像

・進歩、変化が激しい現在の動向をきちんと生徒に伝え、ある程度の国際的、先進的な物の見方ができる専門分野の基礎能力を持った人材。更に次のステップで、その能力を高めようとする人材。
・新校で学び、将来はこの地域に戻り就職し、各企業の戦力となるような生徒が育つと良い。
・自ら探究的な学びを進め、自らが進路実現に向かう、自立していく生徒。
・長野県の産業・地域を支えるとともに自身の幸せを追求できる生徒の育成を願っている。

４　その他

（１）懇話会の進め方

・生徒から、どんな学びをしたいかを十分吸い上げ、カリキュラムに生かしてほしい。

・懇話会では、是非意見交換の時間を確保していただきたい。
・グループワークを希望します。
・意見交換等を通して、新校に対する要望・提案等をその都度汲みあげてほしい。

【アンケートでの質問・回答】

1　先行３校（須坂創成高等学校、佐久平総合技術高校、飯田ＯＩＤＥ長姫高校）について

①先行総合技術高校の統合前後のそれぞれの学科で取得できる代表的な資格の取得率の変化

（先行３校への聞き取り）
・それぞれの専門学科の学びと結びついている資格が多く、統合前後で変化はない。

②先行総合技術高校の統合前後での取得資格や進学・就職先から無くなったり、新規に加わったりしたものはあるか

（先行３校への聞き取り）
・統合前後での変化はない。

③先行総合技術高校が統合されたことにより、自分たちの学びにどのような影響があったのか（単科ではないからこそ、どのようなメリットがあったのか）

（先行３校への聞き取り）
・単科だけでは、学ぶことができない分野を学ぶことができる。
・お互いの科の学びをすることで、教員を含め在籍する専門科の学びが深まる。
・他科の異なった視点での発想をより理解することができ、新たに気づきが生まれる。
・学校にいながらにして、他科の専門的な学びに触れることができる。

④２つのキャンパスで学習をしている佐久平総合技術高校のメリットとデメリットを聞きたい

（佐久平総合技術高校への聞き取り）
・浅間キャンパスに農業科、工業科の専門科（学年制）を設置しているが、臼田キャンパスの創造実践科は総合学科（単位制）である。学びの仕組み自体が異なるが、建設機械等の資格取得は合同で実施している。
・部活動は一緒に行っている。学校が所在している最寄りまでの定期券しか購入できないため、移動は学校でバスを用意している（保護者負担）。部活動での移動等、生徒にとっては、２キャンパスはメリットを感じていない。
・それぞれで学校生活を送っていることに寂しさを感じている生徒もいる。コロナ禍を境として、合同の学校行事が激減し、別の学校として捉えている生徒もいる。

2　総合学科と総合技術高校の違いについて

・総合学科は「産業社会と人間」及び専門教科・科目を合わせて 25 単位以上設けており、各専門学科に跨るような科目選択も可能であるが、必ずしも専門科目を選択する必要はなく、生徒の進路実現や興味・関心をもとに科目選択を行っている。
・総合技術高校は、学科の枠を越えた連携や、所属学科以外の専門科目を学ぶことができるが、所属学科での学びをベースとして所属学科の専門科目 25 単位以上の修得が必要である。
・したがって、総合学科高校は専門性を深めるための科目選択は可能であるものの自由な科目選択を行っているのに対して、総合技術高校は他学科の基礎的な科目や学科横断的な学びができる等、学科を連携させた教育活動を展開しているものの所属学科の専門性を確保しているところに違いがある。
　総合技術高校：須坂創成高校　佐久平総合技術高校　飯田ＯＩＤＥ長姫高校
　総合学科高校：中野立志館高校　市立長野高校　丸子修学館高校
　　佐久平総合技術高校（創造実践科）　塩尻志学館高校　蘇南高校

３　３校（更農、松代、屋南）の専門科の延長線上にある上級学校への進学と就職の状況

〇更級農業高校農業科

卒業年度		R5	R4	R3	R2	R1
卒業生徒数		132	152	142	141	149
大学	専門科目の学習を生かした進学者数	5	3	3	2	2
	上記のうち就農を目的とした進学	0	0	0	0	0
	上記以外	4	10	8	4	4
短大	専門科目の学習を生かした進学者数	0	2	0	0	1
	上記のうち就農を目的とした進学	0	2	0	0	0
	上記以外	9	6	6	9	5
専門学校	専門科目の学習を生かした進学者数	9	6	5	1	0
	上記のうち就農を目的とした進学	1	1	0	0	0
	上記以外	31	31	44	32	50
長野県農業大学校		3	7	4	2	2
就職	就農者（①②）	0	2	0	2	3
	農業関連就職者（④⑤⑥⑦⑧⑩）	11	16	14	25	20
	上記以外（③⑨⑪⑫⑬）	59	65	58	63	62
その他（アルバイト・家居等）		1	4	0	1	0

就職内訳 職種	①専業農家	0	0	0	1	0
	②農業生産法人等	0	2	0	1	3
	③公務員	3	1	3	0	1
	④農協	0	3	1	4	0
	⑤森林組合等	0	0	0	1	1
	⑥食品製造等	11	13	13	18	19
	⑦バイテク関連	0	0	0	0	0
	⑧林産物加工等	0	0	0	0	0
	⑨建設関係	5	0	14	10	0
	⑩造園関係	0	0	0	2	0
	⑪生活福祉関連	0	1	3	4	2
	⑫その他農業関連	1	0	0	2	0
	⑬上記以外	50	63	38	47	59

〇松代高校商業科

卒業年度		R5	R4	R3	R2	R1
卒業生徒数		41	62	83	87	107
大学	商業系	2	1	4	11	8
	商業系以外	1	0	2	2	0
短大	商業系	1	2	2	7	1
	商業系以外	2	3	7	1	7
専門学校	商業系	12	8	16	6	15
	商業系以外	11	15	13	18	16
就職	商業系	8	12	9	11	10
	商業系以外	4	21	30	31	50
その他（アルバイト・家居等）		0	0	0	0	0

〇屋代南高校ライフデザイン科

卒業年度		R5	R4	R3	R2	R1
卒業生徒数		25	33	35	36	33
大学	服飾系	0	0	0	0	0
	食物系	0	0	0	1	1
	上記以外	0	1	2	2	0
短大	服飾系	0	0	0	0	0
	食物系	0	2	1	2	0
	上記以外	1	2	0	2	0
専門学校	服飾系	1	1	6	4	6
	食物系	7	4	4	3	11
	上記以外	10	10	8	7	7
就職	服飾系	1	1	1	0	0
	食物系	1	4	2	0	0
	上記以外	4	6	7	11	8
その他（アルバイト・家居等）		0	2	4	4	0

「長野千曲総合技術新校再編実施計画懇話会」のスケジュール

高校再編推進室

年度	月・日	懇話会・校地検討会議	内　容
令和５年度 (2023 年度)	１月 11 日	**第１回懇話会**	○「県教委より説明」 ・実施方針、三次の説明
令和６年度（２０２４年度）～	４月 25 日	**第２回懇話会**	○目指す学校像（ビジョンの共有） ・総合技術高校について羽山須坂創成高校長による講演 ・３校生徒による学校・学びの紹介
	６月 10 日	**第３回懇話会**	○目指す学校像（ビジョンの共有） ・鳴門教育大学　藤村裕一教授による講演
	９月３日	**第４回懇話会**	○目指す学校像 ・これまでの懇話会の振り返り
	11 月・12 月 （予定）	**第５回懇話会**	○目指す学校像 ・
	１～２ヶ月に１回開催予定	以降は、進捗状況に応じて開催予定 学校像がある程度見えてきたところで校地会議を開催	＜意見交換項目＞ ○学校像、新校の学び ○設置課程 ○活用する校地・校舎 ○募集開始年度 ○募集学級数 ↓ **再編実施基本計画を教育委員会定例会で決定** ↓ **統合について県議会で同意** ※議会同意後、学校運営、校名・校歌・校章、地域協働等の細部にわたる具体的な検討を進める。 新校開校まで随時（３～４回／年）程度開催 ↓ **新校開校**

須坂新校（仮称）再編実施基本計画

１　再編統合対象校

須坂東高等学校、須坂創成高等学校

２　募集開始（開校）年度

令和 11 年度

今後両校の学校規模の縮小化が避けられない状況の中、できるだけ早期の統合が必要であることと、施設の整備期間等を考慮し、令和 11 年度を新校の募集開始年度とする。

３　活用する校地・校舎

須坂創成高等学校

「新校で構想する学び」の実現を第一に考え、専門科と新たな普通科（仮称：みらいデザイン科）の連携を実現していくために、須坂創成高等学校の施設・設備を活用する。

部活動など生徒の自主的活動のため、引き続き旧須坂商業高等学校のグラウンドや体育館等の施設を活用する。

４　設置課程・学科及び開校時に想定する募集学級数

全日制課程　農業科・工業科・商業科・みらいデザイン科（仮称）

４学科あわせて７学級程度を想定

※学科の名称は、今後編成する教育課程等に基づき、開校前年度に決定する。

※新校開校時の募集学級数は、毎年度定める「長野県立高等学校生徒募集定員」により開校前年度に決定する。

みらいデザイン科（仮称）は、高等学校における「普通教育を主とする学科」の弾力化（高等学校設置基準及び高等学校学習指導要領の一部改正）により設置可能となった「新たな普通科」の１つである、地域社会に関する学科[注]として設置する。また単位制を導入し、他学科の授業も選択できる、個別最適な学びにふさわしい教育課程を編成する。

北信地域の中学校卒業予定者数の推移や現在の募集学級数から、新校の開校年度には７学級程度が想定される。

注）現代的な諸課題のうち、高等学校が立地する地元自治体を中心とする地域社会が抱える諸課題に対応し、地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科。

５　学びのイメージ

別紙のとおり

地域をフィールドとした探究を学びの中心に据え、「実社会の課題と向き合い、地域を学びの場に成長し続ける高校」を構想する。

６　施設整備

新校の学びに必要な施設及び、地域連携の実現のため必要な機能の整備を図る。

・施設整備に要する期間　６年程度を想定

学びのイメージ

実社会の課題と向き合い、地域を学びの場に成長し続ける高校

育てたい生徒像

- ○ 探究的な学びにより身に付けた力で自分の未来を積極的にデザインできる生徒
- ○ 他者や社会と主体的に協働できる、コミュニケーション力を持った生徒
- ○ 多様な他者とつながり、新しい価値を生み出し、よりよい社会実現のために学び続ける生徒

目指す学校像

- ○ 地域をフィールドとした探究的な学びをとおして、課題発見解決能力を育む
- ○ 学科や学年を超えた協働的な学びをとおして、キャリアデザイン力を育む
- ○ 地域とともに学び、主体的に地域の未来を創造する力を育む

地域の未来を、地域の方々と共に創る

コミュニティデザインハイスクール

農業科 ― 工業科 ― 商業科 ― みらいデザイン科（仮称）
※新たな普通科

４学科の連携で地域の未来づくりに参画

専門科の学びで得た農業・工業・商業・デジタルなどの視点

みらいデザイン科の探究活動で得た芸術・歴史・福祉・国際などの視点

学びの柱

- ◆ 実体験をとおして、自分と地域の未来を創造する学びを展開
- ◆ 各科の学びの成果をもとに協働的な探究を実施
- ◆ 情報リテラシーを徹底して学習し、いつでも、どこでも、ICT を積極的に利活用

具体的な取組

- ○ 校外学習、校外活動の単位認定（ボランティア、大学の講義、海外留学など）
- ○ 全学科でのデュアルシステム（校外での実践的な学び）
- ○ 世代を超えた交流学習（中学校との合同探究発表会、地域への公開講座など）
- ○ 生徒自らが学校を創造していく自主的活動（生徒会活動と部活動）
- ○ 探究の学びを深化させる「地域連携コーディネーター」が校内に常駐
- ○ 地域との協働による生涯学習の拠点づくり

単位制
学科の枠を超え、他科の専門科目も履修して自身の学びを深化
学校を飛び出してのアクティブな探究活動を学びの中心に

連携
コミュニティデザインを研究する国内外の大学との連携
地域を学ぶ国内外の高校生と交流

地域の方々との共同研究

新校が生涯学習の拠点

須高地域共学共創コンソーシアム

大学・専門学校

医療・福祉機関

地元企業・商工会

自治体

研究機関

中野総合学科新校（仮称）再編実施基本計画

１　再編統合対象校

中野立志館高等学校、中野西高等学校

２　募集開始（開校）年度

令和 12 年度

今後両校の学校規模の縮小化が避けられない状況の中、できるだけ早期の統合が必要であることと、施設の整備期間等を考慮し、令和 12 年度を新校の募集開始年度とする。

３　活用する校地・校舎

中野立志館高等学校

「新校で構想する学び」の実現を第一に考え、学びを支える施設・設備等の学習環境、隣接施設の有用性の観点から中野立志館高等学校の校地・校舎を活用する。

４　設置課程・学科及び開校時に想定する募集学級数

全日制課程　総合学科　７～８学級程度
定時制課程　普通科　　１学級

※学科の名称は、今後編成する教育課程等に基づき、開校前年度に決定する。
※新校開校時の募集学級数は、毎年度定める「長野県立高等学校生徒募集定員」により開校前年度に決定する。

総合学科のシステムを使いながら、持続可能な社会づくりの担い手を育てていくための多彩な教科・科目を開設する。

募集学級数は、旧第２通学区の中学校卒業予定者数の推移や現在の募集学級数から、新校の開校年度には７～８学級程度が想定される。

現在の中野立志館高等学校定時制は、中野総合学科新校に移管する。

５　学びのイメージ

別紙のとおり

中野立志館高等学校の総合学科、中野西高等学校のユネスコスクール[注1]の学びを継承し、ユネスコスクールの中心的な学びであるＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）[注2]をベースにグローカルな人材育成を目指す、地域全体を学びのフィールドとした地域の学びの拠点となる総合学科高校を構想する。

注１）ユネスコスクール：ASPnet(UNESCO Associated Schools Project Network)
・ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校
注２）ESD(Education for Sustainable Development)：持続可能な開発のための教育
・人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できる社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動

６　施設整備

新校の学びに必要な施設設備及び、高校施設の著しい老朽化と社会や学びの変化に対応し質的向上を図っていく。

・施設整備に要する期間　６年程度を想定

中野総合学科新校学びのイメージ

未来に挑戦するための総合学科高校

目指す学校	
○挑戦	様々なことに挑戦し、失敗しても粘り強く取り組む力を育む
○創造	自己と他者を見つめ、社会と積極的に関わりを持ち、変化に柔軟に対応できる創造力を育む
○協働	地域から世界まで、幅広い視野を持ち、他者と協働し未来社会に貢献できる人を育てる

総合学科×ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）

キャリアデザイン　多彩な科目　探究学習・ＥＳＤ

○多様な進路希望に対応できる教育課程

➢ 自分だけの時間割を作成

・キャリアデザイン・ライフデザインに繋がる多彩な系列(科目群)から自由に選択
・大学進学に特化した科目選択も可能

➢ バラエティーに富んだ学び(系列＝科目群)

・普通科目(国語、数学、外国語、芸術等)と専門科目(工業、商業、農業、家庭等)に加え、デジタル(AI、ロボット)、福祉、観光等の現代的な課題にアプローチする学び

○自分の「好き」や「強み」を究める学びを卒業単位として認定

➢ 単位制の自由度を活かした学校外の様々な取組などを単位認定

・ボランティア活動や長期インターンシップ等の体験的な学び
・英検・漢検などの各種資格取得
・長期・短期の海外留学
・大学生や地域の方とともに取り組む自主的な探究活動

➢ オンラインの活用等による学び

・大学の講義の受講(先取り履修)、専門学校での体験的な授業や他の高校の授業の履修

○環境、地域の課題や国際理解について地域と協働して取り組むESD

➢ 地域全体を学びのフィールドとした学習活動

・多様性受容力を高め、学びを深めるための地域共学共創コンソーシアムとの連携(地域の人などを外部講師として活用した授業、地域と協働したフィールドワーク等)

➢ 異文化理解を深めるための海外との交流や海外留学への支援

・国内外のユネスコスクールとの交流やESD協働学習
・国内外の姉妹校との交流
・地域の教育資源(観光等)を活用した国際交流
・地球規模の課題(平和、貧困・格差等)に取り組むための学校が独自に設定する科目
・信州つばさプロジェクトの積極活用

地域共学共創コンソーシアム

大学・専門学校
幼保小中高

研究・医療
福祉機関

地域産業

自治体

ユネスコスクール

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization
National Coordination Japan
UNESCO Associated Schools

【中野立志館高校の定時制課程は中野総合学科新校に移管】

学びのイメージ　検討手順

学びのイメージ
完成

新しい学校の形

・設置課程、学科
・活用する校地、校舎
・想定する募集学級数
・卒業後の進路保障　など

新しい学校の中身

・特色あるカリキュラム
・学びの融合
・魅力づくり　　など

目指す学校像
育てたい生徒像

・教育方針、学びの柱
　どんな学校にしたいか
　どんなことを学んでみたいか

共通理解

・懇話会の趣旨説明
・全国の先行事例について
・3校の学校・学びについて